

都農町文化財調査報告書第2集

しん び ゆ う しも ばる
新 別 府 下 原 遺 跡

県営都南地区圃場整備事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1989

宮 崎 県 児 湯 郡

都農町教育委員会

都農町文化財調査報告書第2集

しん び ゅう しも ばる
新 別 府 下 原 遺 跡

県営都南地区園場整備事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1989

宮 崎 県 児 邑 都

都農町教育委員会

序

この報告書は昭和63年度、県営は場整備事業に伴ない、児湯農林振興局の委託を受け、都農町の都南地区に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の記録であります。

63年9月から平成元年2月までの発掘調査の結果、縄文土器、石斧、石鎌、弥生土器、磨石、石庖丁、砥石、石錘、鉄器等々数多くの遺物及び遺跡が発見されました。

これらの遺物を郷土の歴史的遺産として適切な保管をはかり、本書の刊行が町史解明の貴重な資料となることは、ひいては郷土愛の機運を醸成することとなりまことに意義深いものがあります。開発と文化財の保護に思いをいたし、広く生涯学習の資料として御活用を願います。

本事業の推進と本書の刊行にあたり、県文化課、児湯農林振興局、都南地区土地改良区、等関係各位の御指導、御協力に対し深甚の謝意を表しますとともに、直接、発掘調査、刊行に積極的な御尽力をいただきました長津宗重氏他各位へ厚くお礼を申し上げます。

平成元年3月

都農町教育長 守 部 寛

例　　言

1. 本書は、都農町都南地区の県営圃場整備事業に伴ない、昭和63年度に実施した新別府下原遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、都農町教育委員会が主体となり、県文化課主任主事長津宗重が担当した。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体 都農町教育委員会

教育長	守	部	寛
社会教育課長	河	野	武
課長補佐	河	野	吉
主　　査	金	谷	孝
			サエ子

特別調査員	愛媛大学法文学部教授	下	條	信	行
	県総合農業試験場科長	有	村	玄	洋

調査員 長津宗重

発掘作業員 入江富積・横田常一・植田タツエ・内野宮尊信・遠藤宏二・
大喜多スエ・大喜多茂・河野清美・河野吉夫・河野ゼン子・
河野良雄・神崎五月・九鬼武夫・黒木カツヨ・黒木年男・
黒木初美・黒木正春・黒木三代子・佐山恭三・長友シヅ子・
長友愛子・長友綾子・永山光子・坂田信子・西尾 異・
西尾富子・西尾りきこ・原 節子・坂東順子・松下トシ子・
三輪信夫・矢野忠利・山崎美春・山本房義・山本チヨ子・
横尾芳寛

整理作業員 家村真澄・河野清美・田原辰子・富高和子・野田和美・
増田慈子・森 美知子

4. 本書の執筆は、長津・河野が分担し、文責については目次に明記している。
5. 本書の編集は長津が担当した。
6. 土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。

本文目次

第 I 章 序 説	1	
1. 発掘調査に至る経緯	河野	1
2. 新別府下原遺跡の歴史的環境	長津	1
第 II 章 遺構と遺物	長津	4
1. 調査区の設定と概要		4
2. 包含層の状態		4
3. 弥生時代の遺構と遺物		7
第 III 章 まとめ	長津	14

挿図目次

第1図 新別府下原遺跡周辺の遺跡分布図	2
第2図 新別府下原遺跡の遺構分布図	5～6
第3図 A地区1号住居実測図	8
第4図 B-7区1・2号周溝状遺構実測図	9～10
第5図 B-1区4号住居・2号土壙実測図	11
第6図 弥生土器実測図	12
第7図 磨製石斧・石庖丁・実測図	13

表 目 次

第1表 穹穴住居観察表.....	8
第2表 弥生土器観察表.....	13

図 版 目 次

図版1 A地区（発掘前）・A地区（西から）	
図版2 A地区1号住居遺物出土状況・A地区1号住出土石塗丁	
図版3 A地区1号住居・B地区土層断面	
図版4 B地区（発掘前）・B地区全景（東から）	
図版5 B-1区全景・B-1区全景（東から）	
図版6 B-1区3号住居・B-1区4号住居	
図版7 B-1区1号周溝状遺構・B-1区2号土塙遺物出土状況	
図版8 B-2区全景・B-3~4区全景	
図版9 B-7区全景・B-7区1・2号周溝状遺構	
図版10 B-7区1号周溝状遺構土器出土状況・圃場整備事業中のA地区	

第Ⅰ章 序 説

1. 発掘調査に至る経緯

宮崎県児湯郡都農町において、昭和58年度から、都南地区の県営圃場整備事業が行なわれている。昭和62年度に都農町教育委員会が、町内の遺跡詳細分布調査を行ない事業区内における遺跡の存在が確認された。さらに県文化課の63年3・6月の試掘により再確認された。調査により事業区内に遺跡の存在が判明したため、宮崎県児湯農林振興局と埋蔵文化財の保護について協議が行なわれたが、事業施行上、保存が困難な部分は、事業との並行発掘により昭和63年度に記録保存の処置をとることとなった。昭和63年8月に地元との協議も終り、同年9月5日～平成元年2月1日まで発掘調査が行なわれた。

都南地区的圃場整備事業は、本年度で工事は終了し、来年度以降道水路舗装工事が残されている。調査は、都農町教育委員会が主体となり、宮崎県文化課 長津宗重氏が担当した。

2. 新別府下原遺跡周辺の歴史的環境

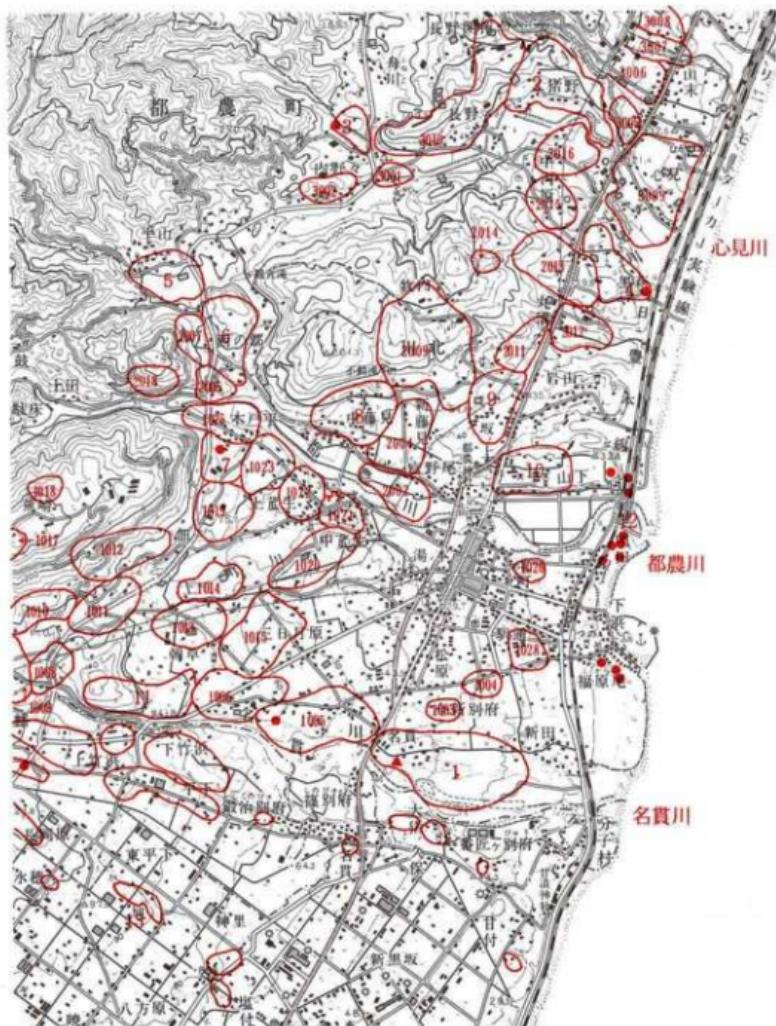
都南地区遺跡は宮崎平野北部段丘群の三角洲性低地（名貫川開析扇状地）で、標高30m、比高10mである。

都農町内の遺跡は心身川、都農川、名貫川流域に分布している。

旧石器時代遺跡としては尖頭器・石核が出土した黒萩遺跡が知られていたが、⁽¹⁾遺跡詳細分布調査によって京塚遺跡・又猪野原遺跡で剥片が表採された。⁽²⁾

縄文時代の遺跡は台地（美々津・都農段丘群、名貫川開析扇状地）に分布している。早期の遺跡としては、楕円形・山形・格子目の押型文の土器、打製石器などを出土した竜ヶ平第1遺跡、⁽³⁾楕円形・山形の押型文・打製石器を出土した舟川中原遺跡がある。⁽⁴⁾後期の遺跡としては、綾式の土器・石錘を出土した三日月原遺跡がある。⁽⁵⁾

弥生時代の遺跡としては、中期の新別府下原遺跡・新田遺跡があり、特に新別府下原遺跡では、試掘調査によって5軒の堅穴住居が確認されている。⁽⁶⁾後期の遺跡としては、後期初頭の又猪野原遺跡、⁽⁷⁾後半の境ヶ谷第1遺跡、末葉の木戸平遺跡がある。⁽⁸⁾境ヶ谷第1遺跡では2軒の堅穴住居が確認され、鉄器（鉈）も出土している。⁽⁹⁾また耕作中に一辺5



第1図 新別府下原遺跡周辺の分布図(縮尺 1/50,000)

1. 新別府下原遺跡(▲)
2. 又猪野原遺跡
3. 舟川中原遺跡
4. 黒萩遺跡
5. 平山遺跡
6. 西ノ郡遺跡
7. 木戸ノ平遺跡
8. 京塚遺跡
9. 境ヶ谷第1遺跡
10. 中原遺跡
11. 竜ヶ平第1遺跡
12. 都農古墳群(●)
13. 東平下周溝墓群

1001	新別府遺跡	1021	鍛冶屋敷遺跡	2016	旧牧跡第2遺跡
1003	新別府遺跡	1022	鹿牟田遺跡	2017	松ヶ鼻山遺跡
1004	新別府肥遺跡	1023	上茂生遺跡	2018	井手ヶ平遺跡
1005	新別府川原遺跡	1025	木戸平第2遺跡	3001	内野下原遺跡
1006	下原遺跡	1026	森遺跡	3002	内野遺跡
1008	竜ヶ平第2遺跡	1027	相見遺跡	3005	心見住遷上遺跡
1009	立野遺跡	1028	福原尾遺跡	3006	山末大原第1遺跡
1010	尾立遺跡	2002	師匠田遺跡	3007	山末大原第2遺跡
1011	儀石第1遺跡	2004	黒石遺跡	3008	宮川遺跡
1012	儀石第2遺跡	2005	川神田遺跡	3009	心見遺跡
1013	朝草原遺跡	2007	西ノ郡第2遺跡	3010	長野遺跡
1014	湯牟田遺跡	2009	白水遺跡	3011	舟川尾立遺跡
1015	櫻土手遺跡	2011	境ヶ谷第2遺跡	3012	下征矢原遺跡
1016	後谷遺跡	2012	久次牟田遺跡	3013	上征矢原遺跡
1017	茂生尾立第1遺跡	2013	白石第1遺跡	3014	東平遺跡
1018	茂生尾立第2遺跡	2014	白石第2遺跡	3015	寺迫下原遺跡
1019	馬場口遺跡	2015	旧牧跡第1遺跡	3016	中村遺跡
1020	中河原遺跡				

mの方形プランの周溝状遺構が1基確認されている。⁽¹²⁾今回発掘調査を行った新別府下原遺跡では弥生末の竪穴住居7軒と周溝状遺構3基・土壙4基が検出され、周溝状遺構1基・竪穴住居3軒・土壙2基が集落の1単位として抽出されたのは注目される。

古墳時代の遺跡としては、6世紀後半の須恵器（环身・腹）を出土した平山遺跡、須恵器の坏・甕を出土した西ノ郡遺跡がある。古墳としては前方後円墳3基・円墳21基の計24基で、その内21基は積石塚である。発掘調査は行われていないので古墳の内容については不明である。古墳初頭の遺跡としては中原遺跡がある。⁽¹³⁾

当地域では発掘調査がほとんど行われていないために、地域史を具体的に描写できるまでには至っていない。

註

- (1) 宮崎県『土地分類基本調査 都農』1984
- (2) 茂山 譲・大野寅夫「児湯郡下における旧石器」『宮崎考古』第3号 1977
- (3) 都農町教育委員会『都農町遺跡詳細分布調査報告書』1988
- (4)～(10) 註3と同じ
- (11) 石川恒太郎「児湯郡都農町岩山遺跡調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第18集 1976
- (12) 昭和63年11月、畑耕作中に発見された。
- (13)～(15) 註3と同じ

第Ⅱ章 遺構と遺物

1. 調査区の設定と概要

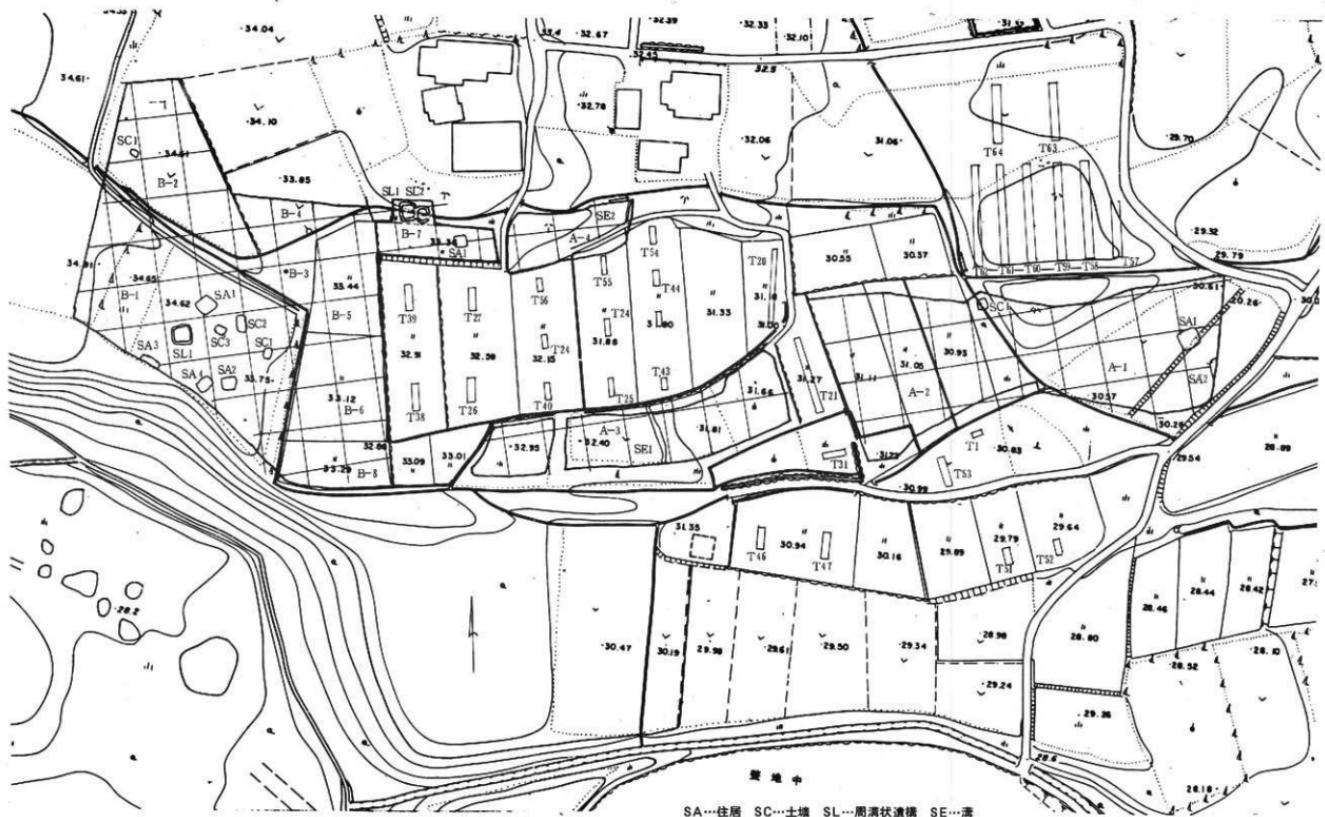
新別府下原遺跡（都農町大字川北字新別府下原）は、宮崎市の北々東約3.8kmの名貫川を南に臨む標高3.0mに位置する。

都南地区圃場整備事業に伴って県教育委員会文化課が昭和63年6月10日～16日に試掘調査を行った結果、遺跡が2ヶ所確認されたので、昭和63年9月5日～平成元年2月1日まで約14000m²の発掘調査を都農町教育委員会が行った。南北方向で10m方眼のグリッドを設定し、発掘調査した順番で東からA・B地区とした。A地区の北側を試掘調査した結果、窪地から縄文後期の土器片が出土したが、遺構の存在が推定される場所は既に削平されていた。A地区（6000m²）では東側の部分で弥生末の竪穴住居2軒・土壙1基検出された。特に1号住居から磨製石庖丁1・両端えぐり入り石庖丁1・砥石1・磨石4・鉄鎌片などが出土したのは注目される。また西へ200m離れたB地区（8000m²）では弥生末の竪穴住居5軒・周溝状遺構3基・土壙4基が検出された。特にB-1区では竪穴住居4軒・周溝状遺構1基・土壙3基が検出されており集落の1単位が抽出された。1号周溝状遺構は幅約50cmの溝を隅丸方形に全周させており、一辺約5mの規模である。またB-1区では縄文の打製石簇1が、B-8区では縄文後期の磨製石斧1・打製石斧3が出土した。

2. 包含層の状態

当遺跡では、アカホヤ層はA地区ではほとんど残存しておらず、B地区ではB-1・2・7区が残存していたが、他の区では残存していない。

当遺跡の水田部分の基本層序は、第I層が黒褐色土層（Hue 10 YR 3/1・水田耕土）、第II層が赤褐色土層（7.5 YR 8/8・水田床・鉄分を多く含み、硬質である）、第III層が黒褐色土層（10 YR 3/1）、第IV層が黒色土層（10 YR 1.7/1・細礫を多く含む）、第V層が褐色土層（7.5 YR 4/4・アカホヤ層ブロックを含む）第VI層が黄褐色土層（7.5 YR 8/8・アカホヤ層）、第VII層が褐色土層（7.5 YR 6/8・砂礫層）である。畑部分の基本層序は、第I層が黒色土（10 YR 1.7/1）であり、水田の基本層序の第I～III層に対応する。遺物は第IV層から出土する。



第2図 新別府下原遺跡の遺構分布図(縮尺 1/1000)

0 10 50 100 m

3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生末の遺構はA地区の東側のA-1区で竪穴住居2軒・土壙1基、B地区のB-1区で竪穴住居4軒・周溝状遺構1基・土壙3基、B-2区で土壙1基、B-7区で竪穴住居1軒・周溝状遺構2基が検出された。弥生末の甕・壺・高坏・鉢などと共に、石庖丁・砥石・磨石・石錘などの石器、鎌・鎌などの鐵器が出土している。

(1) 竪穴住居(第3・5図)

竪穴住居はA地区の2軒、B地区の5軒の計7軒が発掘調査され、A-1区・B-1区・B-7区の3つの集落単位に分かれる。竪穴住居のプランは一辺4~5mの方形で、主柱穴は2本柱で、一部に4本柱が見られる。竪穴住居の切り合いはない。以下、詳細については竪穴住居観察表(第1表)を参照されたい。

(2) 周溝状遺構(第4図)

周溝状遺構はB-1区で1基、B-7区で2基検出された。周溝状遺構は幅50cmの溝を隅丸方形に全周されており、一辺5mの規模である。

B-1区の1号周溝状遺構は主軸は南北方向で、幅50cm、深さ16cmの溝を隅丸方形に全周させており、510cm×480cmの規模である。土器は東側の溝から甕などが出土しているが、量は少ない。B-7区の1号周溝状遺構は幅80cm、深さ40cmの溝を隅丸方形に全周させており、550cm×480cmの規模である。土器は東側と北側で出土しており、特に北側では甕・壺・高坏・鉢などが多数出土している。B-7区の2号周溝状遺構は1号周溝状遺構に切られ、水田造成時にかなり削平されており、幅55cm、深さ13cmの周溝が断続的に隅丸方形に巡っており、495cmの規模である。

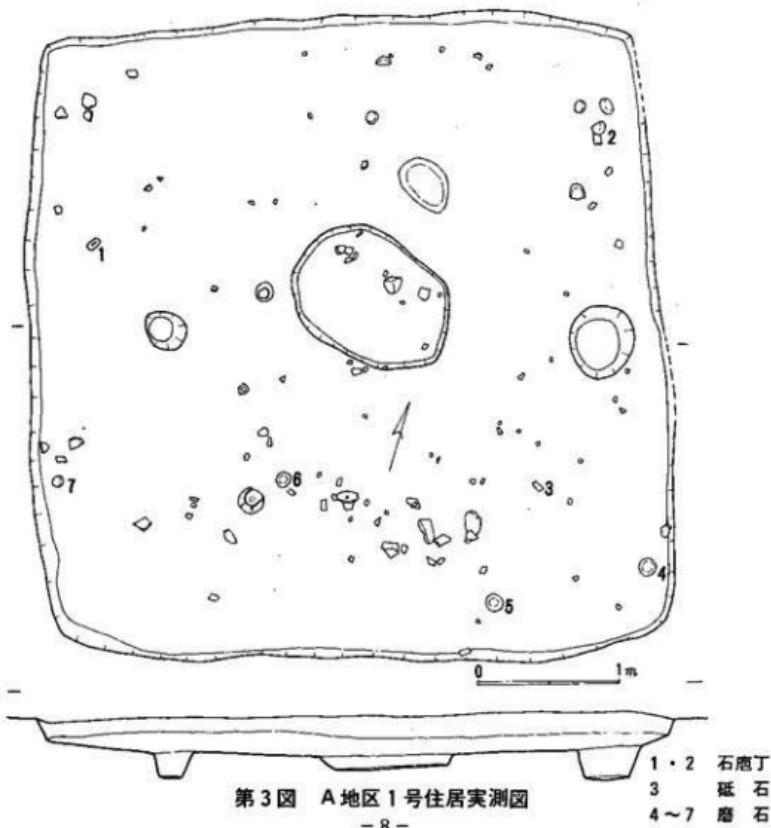
(3) 土壙(第5図)

土壙はA-1区で1基、B-1区で3基、B-2区で1基検出された。

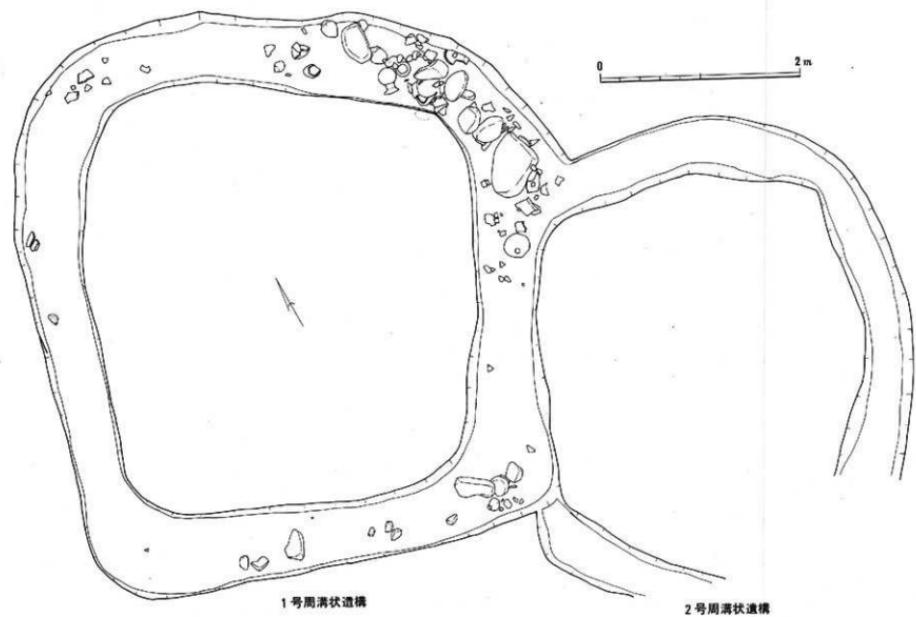
A-1区の1号土壙は長さ270cm、幅265cm、深さ30cmの規模で、甕1が出土している。B-1区の2号土壙の規模は長さ385cm、幅230cm、深さ28cmで、中に長さ180cm、幅105cm、深さ6cmの小土壙がある。高坏・甕・鉢・壺などが多数出土しているが、柱穴・焼土はない。3号土壙は長さ220cm、幅170cm、深さ15cm、4号土壙は長さ370cm、幅265cm、深さ5cmの規模である。B-2区の1号土壙は長さ235cm、幅180cm、深さ25cmで、土器片1・磨石1が出土した。土壙にはすべて焼土はない。

第1表 竪穴住居観察表

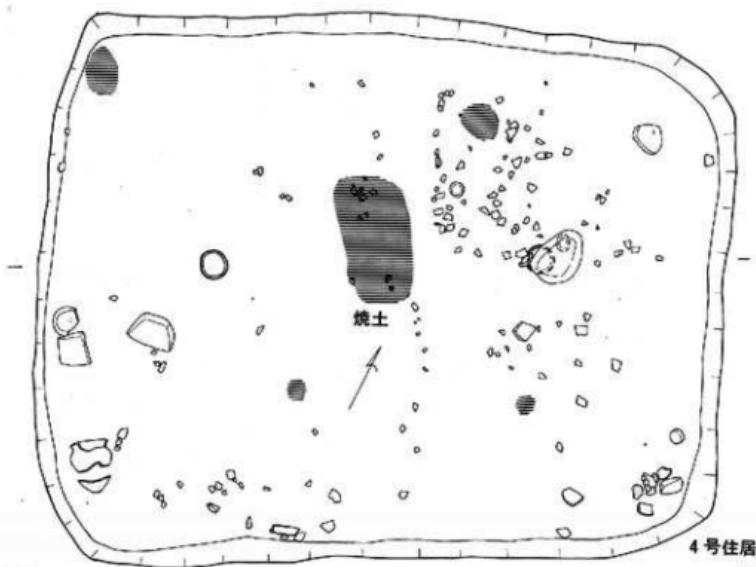
地区	住居	プラン	規 模	面 積 m ²	柱 穴	焼 土	備 考
			長さ×幅×深さcm				
A-1	1号住居	方形	455×445×15	20.2	2	有	石庵丁2・磨石4 砾石1・鉄錆1
	2号住居	方形	(420+α)×(180+α)×15	(17.6)	1+α		
B-1	1号住居	方形	400×365×20	14.6		有	
	2号住居	方形	365×340×40	12.4		有	石鍤1
	3号住居	方形	580×(330+α)×31	(20.3)	2+α	有	
	4号住居	長方形	490×390×30	19.1	2	有	磨石1・鉄片3
B-7	1号住居	方形	470×(450+α)×10	(21.2)		有	擦切り石片3



第3図 A地区1号住居実測図

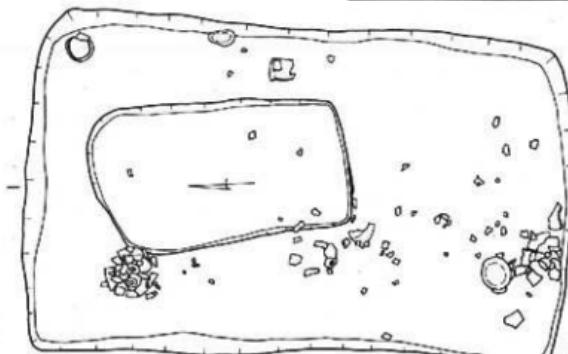


第4図 B-7区1・2号周溝状遺構



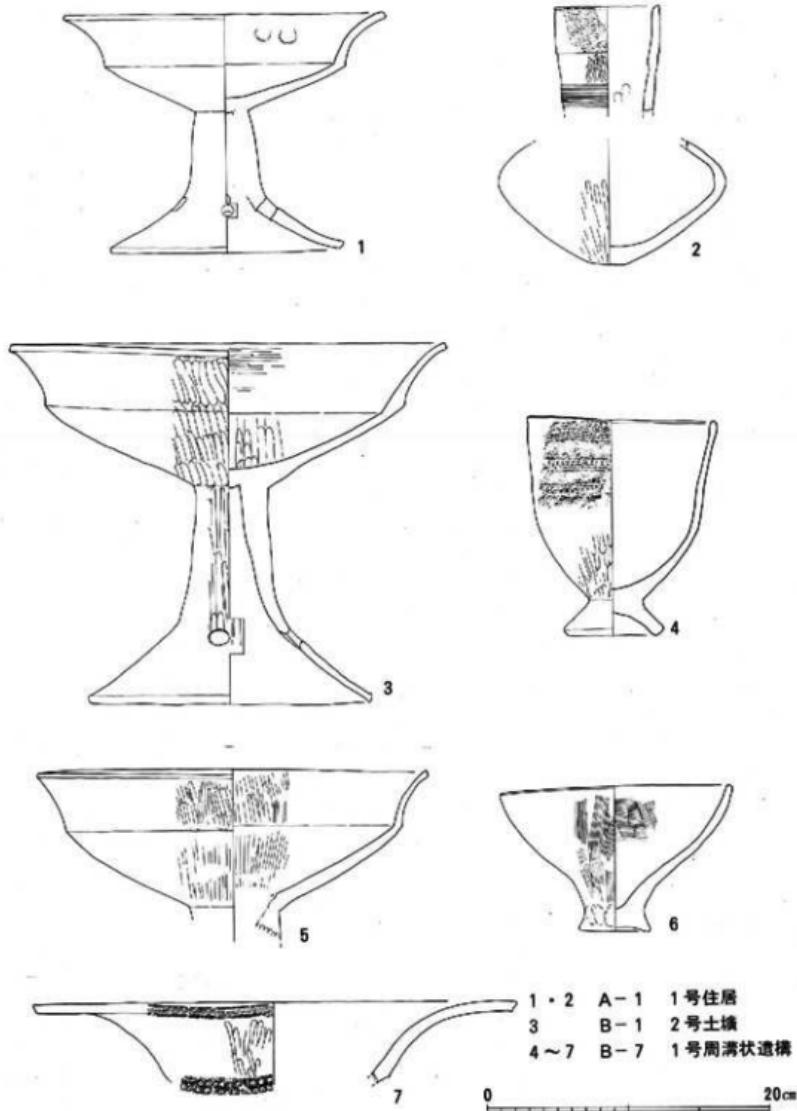
4号住居

0 2m



2号住居

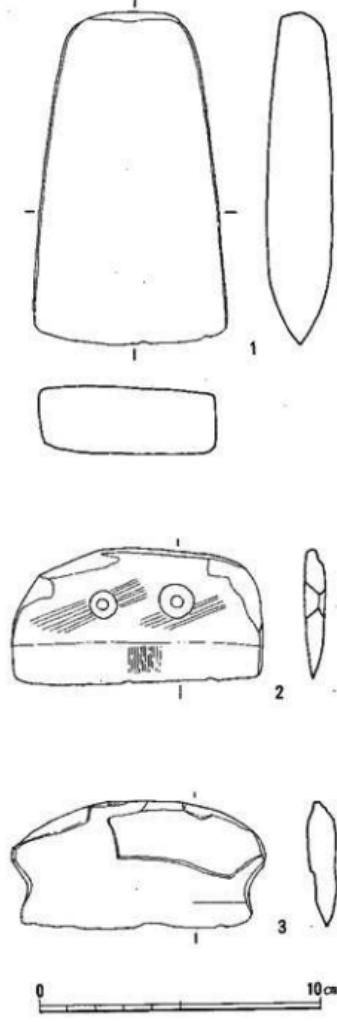
第5図 B1区4号住居・2号土壤実測図



第6図 弥生土器実測図

区分番号	遺構名	部位	器物	調査面		被覆	外観	内面	測定面		H ₁	H ₂	測定面	地土	備考	
				外部	内部				長野	(Hue 5YR 6/6)						
1 A-1	SA1	窓環	环部…斜・横力方向のナデ 脚部…脚部…ナデ	窓部…斜・横力方向のナデ 脚部…脚部…ナデ	窓部…脚部…ナデ	長野	長野 (2.5Y 3/-1)	長野	長野	(Hue 5YR 6/6)	長野	(Hue 5YR 6/6)	透明に光る性・山・灰色 の砂粒を含む	4万方向円形透し		
2 A-1	SA1	窓	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	長野	長野 (5YR 6/-6)	長野	長野	(5YR 6/-6)	長野	(5YR 5/-4)	透明に光る性・山・黑色 の砂粒を含む	口縁部に輪縫波状 と10条の輪縫		
3 B-1	SC2	窓環	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	長野	長野 (10YR 5/-4)	長野	長野	(10YR 5/-4)	長野	(10YR 5/-4)	透明で光る性・山・黑色 の砂粒を含む	口縁部に輪縫波状 と10条の輪縫		
4 B-7	SL1	窓環	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	長野	長野 (10YR 7/-6)	長野	長野	(5YR 6/6)	長野	(7.5YR 7/-6)	1~4ミリの白・茶の 砂粒を含む			
5 B-1	SL1	窓環	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	長野	長野 (10YR 7/-6)	長野	長野	(10YR 7/-6)	長野	(10YR 7/-6)	2~3ミリ割後の白・灰色 の砂粒を含む	11倍強・垂直波状又 環部…竹管文		
6 B-7	SL1	窓	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	長野	長野 (10YR 7/-4)	長野	長野	(10YR 7/-4)	長野	(10YR 7/-6)	2~4ミリの白・茶・ スズ付岩	口縁部に輪縫波状 と10条の輪縫		
7 B-7	SL1	窓	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	环部…脚部…脚部…ナデ 脚部…脚部…ナデ	長野	長野 (10YR 7/-4)	長野	長野	(10YR 7/-6)	長野	(7.5YR 7/-6)	白い繊維状・2~3ミリ の茶・灰の粒を含む			

第2表 弥生土器観察表 (SA…堅穴住居・SC…土器・SL…周溝状遺跡)



第7図 磨製石斧・石臼実測図

第Ⅲ章 まとめ

新別府下原遺跡は縄文時代後期と弥生時代中期・後期末葉～庄内式併行期の遺跡であるが、最盛期は弥生末～庄内併行期の一時期であり、その後は遺跡としては営まれていない。弥生中期の集落(5+α軒)から末の集落(7軒)の間には断絶があり、未調査区に集落の存在が推定される。

縄文後期の遺物としては、貝殻条痕の上器に共なって打製石鎌・打製石斧・磨製石斧などが出土したが、残念ながら遺構は存在していなかった。遺構は未調査区に求められる。遺構に共なわなかったが、定角式の磨製石斧は県内では初であり、石材の蛇紋岩の産地を今後特定する必要がある。

弥生時代中期の住居は、試掘のみであり集落の広がりを追究できるまでに至っていない。5軒の住居の存在が確認されたが、一時期での同時存在の軒数は不明である。弥生末の住居は7軒発掘調査され、立地からA-1区・B-1区・B-7区の3グループに分かれる。県内で弥生時代後期後半～末の集落で発掘調査されたのは、日向市の越シ遺跡(2軒)、⁽¹⁾川南町の上ノ原遺跡(6軒)、⁽²⁾西都市の寺原第1遺跡(2軒)、⁽³⁾宮崎市の熊野原遺跡B地区(16軒)⁽⁴⁾・前原北遺跡(16軒)⁽⁵⁾・源藤遺跡(5軒)⁽⁶⁾、⁽⁷⁾清武町の浦田遺跡(6軒)、⁽⁸⁾野尻町の大萩遺跡(6軒)、⁽⁹⁾都城市の丸谷第1遺跡(2軒)、⁽¹⁰⁾祝吉第1遺跡(7軒)、⁽¹¹⁾祝吉第2遺跡(13軒)⁽¹²⁾などがあるが、ほとんどは日向型間仕切り住居を主体とする集落であり、日向型間仕切り住居を有しない集落の様相は不明であった。都農町内における弥生時代の集落としては境ヶ谷第1遺跡で竪穴住居の一部が検出されたのみであった。B-1区で周溝状遺構1基・竪穴住居2～3軒・土壙2～3基という集落の基本的な一単位が抽出された。竪穴住居は面積が20m²前後と日向型間仕切り住居を除くと当時期の方形プランの竪穴住居としては標準的である。柱穴はB-1区の3号住居の4本柱を除くと2本柱を基本としている。

周溝状遺構は県内では日向市の百町原地区遺跡1基、都農町の新別府下原遺跡3基、川南町の野稲尾遺跡2基、⁽¹⁵⁾新富町の鬼付女西遺跡B地区1基、⁽¹⁶⁾宮崎市の熊野原遺跡A地区1基⁽¹⁷⁾・熊野原遺跡C地区1基、⁽¹⁸⁾都城市的年見川遺跡1基が発掘調査されており、野稲尾遺跡の後期初頭を上限として熊野原遺跡C地区の布留式(古段階)を下限としている。プランは熊野原遺跡A地区1号周溝状遺構の盾形を除くと、隅丸方形で一边5mの規模が標準的であるが、熊野原遺跡A地区1号周溝状遺構の700×600cmが最大規模である。周溝状

遺構は集落内及び近接して営まれており、集落を構成する一要素である。周溝の北側や東側から土器が集中して出土する点、熊野原遺跡C地区では周溝内の焼土の存在などから集落共同体で行われる『祭祀』の可能性が指摘されているが、その具体的な内容は不明である。

A-1区の1号住居から方形の石窓丁と両端えぐり入りの石窓丁が出土したのは注目される。県内では73遺跡で131個の石窓丁が出土し、そのタイプの内訳は直線刃外湾形4.3%、外湾刃半月形24.3%、方形22.9%、えぐり入り48.6%である。えぐり入り石窓丁が半数近くを占めており、広義の宮崎平野の海岸部を中心に分布し、一部山間部にも見られる。高鍋町の持田中尾遺跡⁽²⁰⁾2号住居の前期末～中期初頭の外湾刃半月形を上限として、宮崎市の熊野原遺跡C地区1号住居・祝吉第2遺跡⁽²¹⁾10号住居などの古墳初頭を下限としている。えぐり入りは大萩遺跡5号住居の後期後半を上限として、熊野原遺跡C地区1号住居の古墳初頭を下限としているが、川南町の大迫遺跡⁽²²⁾で23個も出土しており、上限は海岸部で測る可能性がある。

A-1区の1号住居は櫛描波状文を有する平底の壺・小型高环から後期末葉に、B-1区の2号土壙は短く外反する坏部を有する大型高环・口縁部が若干外反する平底の大型甕から後期末葉に、B-7区の1号周溝状遺構は櫛描波状文と竹管文を有する装飾高环・長い頸部の丸底の壺・口縁部が若干外反する上げ底の大型甕・櫛描波状文を口縁部に有する高台付きの鉢から庄内式併行期に比定される。

今回の目的的調査によって集落の規模と基本的な単位が確認されたのは大きな成果であった。細かい上器編年・集落構造などの問題点は来年度の本報告書の中で明らかにしていきたい。

註

- (1) 緒方博文 「越シ遺跡」『亀崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財報告書』
1986
- (2) 永友良典 「上ノ原遺跡」『川南町文化財調査報告』4 1986
- (3) 養方政幾 「寺原第1遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集
1985
- (4) 菅付和樹 「熊野原遺跡B地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』
第4集 1988

- (5) 北郷泰道 「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集
1988
- (6) 伊東 但 「源藤遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』1987
- (7) 谷口武範 「浦田遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集
1985
- (8) 石川恒太郎他 「大荻遺跡(1)」「特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」1975
- (9) 面高哲郎 「丸谷第1遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』
(3) 1980
- (10) 北郷泰道 「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第1集 1981
- (11) 面高哲郎 「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第2集 1982
- (12) 長津宗重 「日向型間仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 1985
- (13) 石川恒太郎 「都農町岩山遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第18集
1976
- (14) 緒方博文 「百町原地区遺跡発掘調査概要報告」「昭和63年度埋蔵文化財担当専門職員研修会発表資料」1989
- (15) 近藤 協 「野稲尾遺跡概要報告」『宮崎考古学会発表資料』1987
- (16) 昭和59年、県教育委員会が発掘調査した。本年度、宮崎県文化財調査報告書第32集に掲載。
- (17) 菅付和樹 「熊野原遺跡A地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』
第4集 1988
- (18) 面高哲郎 「熊野原遺跡C地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』
第2集 1985
- (19) 宮崎県立博物館『図説 宮崎の歴史』1967
石川恒太郎 「宮崎県の考古学」 1968
- (20) 北郷泰道 「持田中尾遺跡」 1982
- (21) 川南町教育委員会「川南町の埋蔵文化財」 1983
- (22) 長津宗重 「弥生後期～庄内・布留式併行期の土器編年」「シンポジウム地域間交流を考える」 1985

図 版

図版 1



A 地区（発掘前）

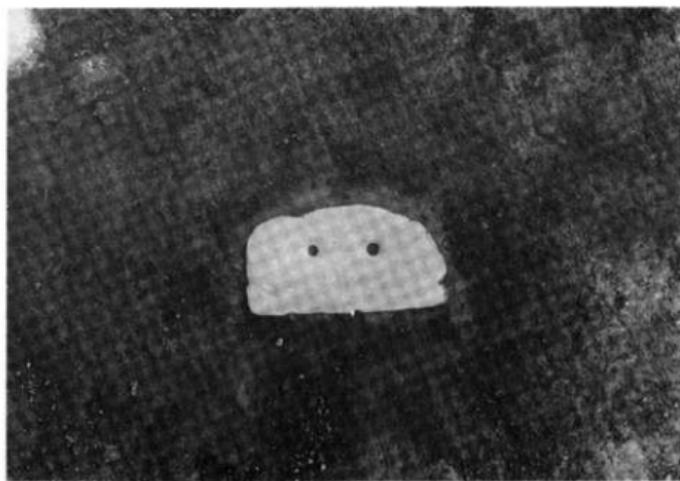


A 地区（西から）

図版 2

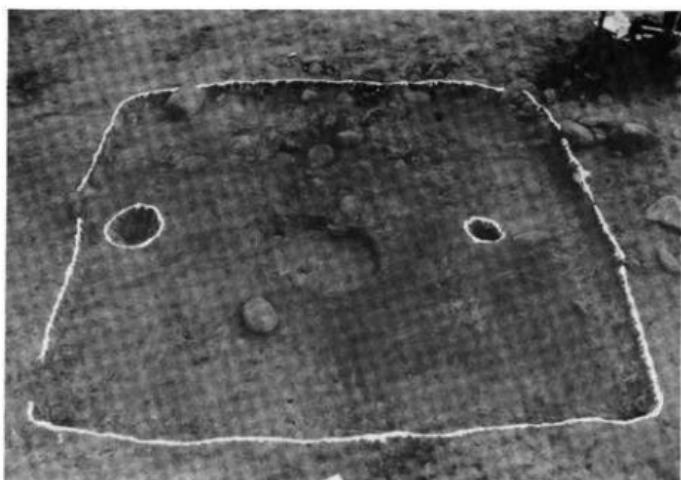


A地区 1号住居土器出土状況



A地区 1号住居出土石庖丁

図版 3



A 地区 1 号住居



B 地区 土層断面

図版 4



B地区（発掘前）



B地区全景（東から）

図版 5



B-1区 全 景

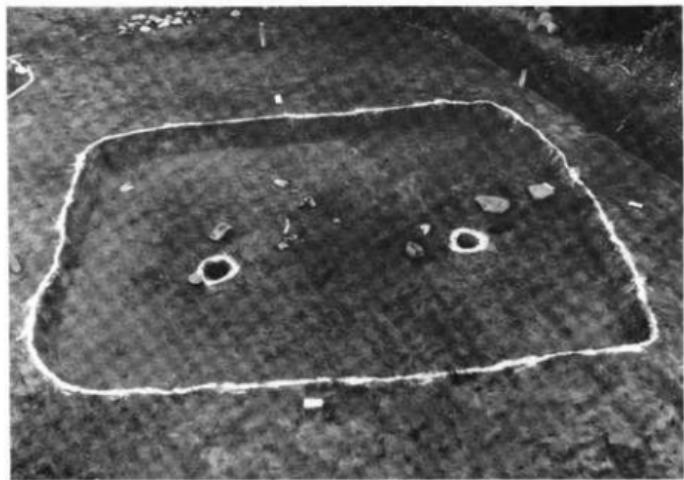


B-1区 全景（東から）

図版 6

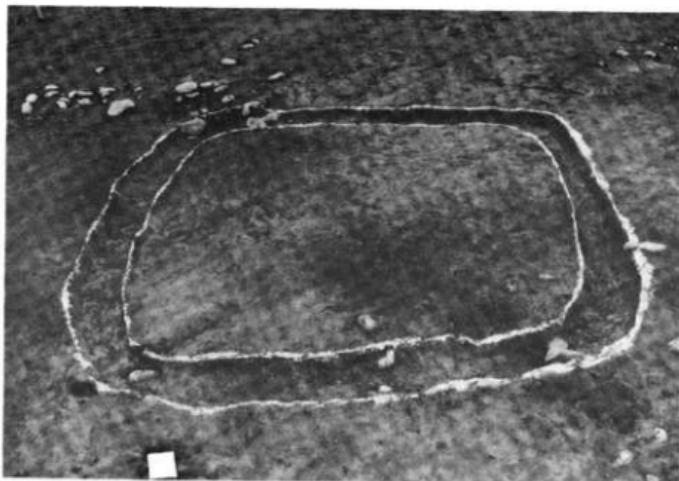


B - 1 区 3号住居

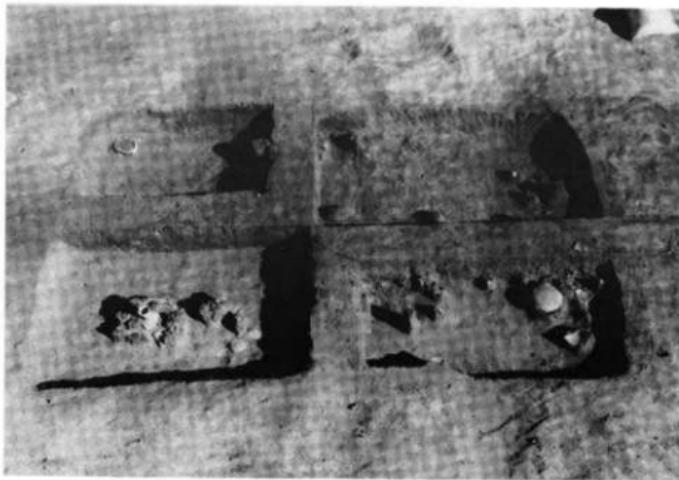


B - 1 区 4号住居

図版 7

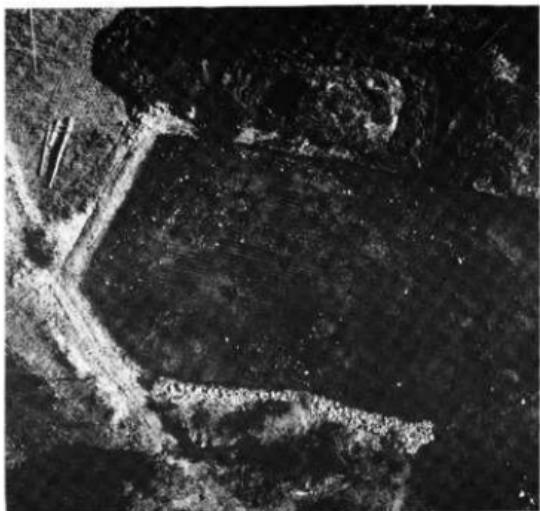


B - 1 区 1号周溝状遺構



B - 1 区 2号土壤遺物出土状況

図版 8



B - 2 区 全 景

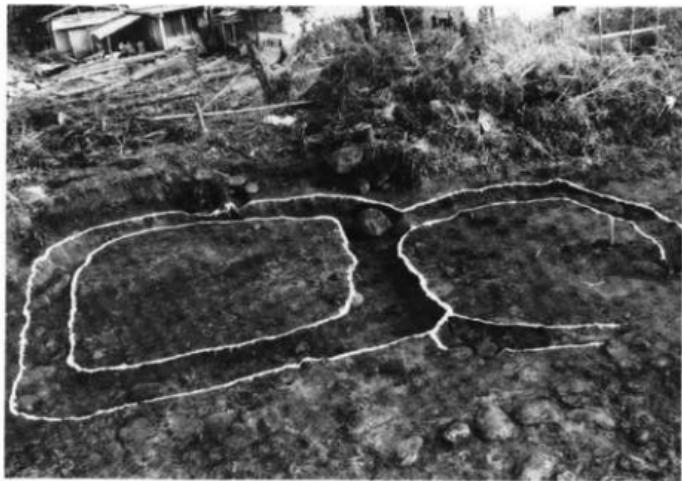


B - 3・4 全 景

図版 9



B-7区 全 景



B-7区 1・2号周溝状遺構

図版 10



B-7区 1号周溝状遺構土器出土状況



圃場整備中のA地区（西から）

都農町文化財調査報告書 第2集
新別府下原遺跡

発行年月 平成元年3月31日

編集・発行 都農町教育委員会

印 刷 熊谷印刷